

## 〔新収品紹介〕

かすが おおまるぼん  
春日大丸盆について

大和文華館の新収品の一つに春日大丸盆があります。この盆はその名の通り表面の径54.2～54.5センチ、底径44.8～45.5センチ、厚さ3.4～4.2センチ、重量4.5キログラムという巨大な一枚板からなり、表面は鮮かな朱塗りで縁と裏面は黒塗りで、下地に布を貼った形跡はありません。塗り自体は良質で発色も良好です。

この盆で一番不思議な点は写真に見られるように裏面に石竹文といわれる一種の変った花文が五箇、螺鈿で象嵌されており、しかも螺鈿の部分が他の部分と同一平面となっていることでもあります。従って使用に際しては他の部分と同様に摩擦されて損傷を受けざるをえないこととなります。この盆は実際にはよく使用された見え底部の外縁部は豊擦れが目立っています。

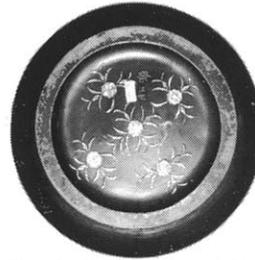
数日前この大丸盆を持参して春日大社を訪れ、花山院親忠宮司と宝物係の千鳥祐信名誉預の特別の御好意により同社蔵の大丸盆とよく比較調査をさせて戴きました。

春日大社にはこの種の大丸盆が数面保存されておりますが、まず寸法は表面の径は54.7センチで、文華館のものと大差なく、ただ著しい相違点は文華館の盆の裏面は平滑であるのに反し、大社の盆は幅3.5センチ、径43センチの高台

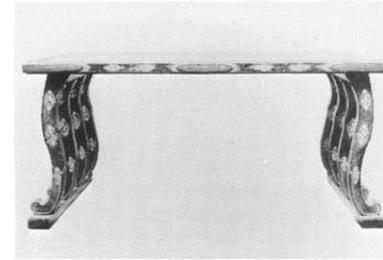
をつけ、高台の内部はゆるい傾斜をつけて凹みをつけ、そこに文華館のものと略同様の五箇の石竹文が螺鈿で象嵌されております。従って大社の盆は使用に際して底部の螺鈿装飾は摩擦の惧れがなくなっておるということです。塗りは文華館のものと略同様ですが、少くとも黒塗りの縁の部分には布を着せたことが明瞭に見えます。

ところでこの三箇一組の盆は旬祭しんさい（毎月の一、十一、二十一日）の献饌けんぜんに使用するのが本来の用途であります。大正15年に出版された『官幣大社春日神社大鑑』の図版解説によりますと「現今は大丸盆は使用せず、唯中小丸盆の二種を用ふ。」と誌されており、花山院宮司、千鳥宝物係のお二人ともそれを肯定しておられました。

この丸盆も使用する時は本社大床おほとこに、まず真薦まゐらを敷き、その上に蒨黄地に華麗な文様の唐織の地敷ぢしき（縦75.7センチ、横74.2センチ）を載せ、その上に八足案やっすあな（高さ43.0センチ、幅92.4センチ、奥行45.4センチ）を安置し、初めに土器に盛った神饌を丸盆に載せて八足案の下に運び、それから神饌を盛った土器を鄭重に八足案の上に移し終えたら、空になった盆は案の下に伏せて置きます。このような動作を慎重に行うには大丸盆は重す



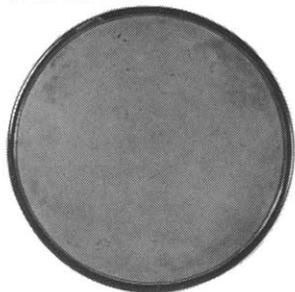
春日大丸盆(裏) 春日大社蔵 八足案 春日大社蔵



ぎるのでいつとはなしに使用されなくなったものと見えますが、空になった盆を小中大の順に伏せて置くと大丸盆の螺鈿の装飾が初めて生きてくることになるわけです。この八足案は大丸盆と同様朱と黒塗りで八本の脚の三側面と甲板の四側面は金銅の隅金具と螺鈿で装

飾されております。この旬祭は鳥羽天皇の保安2年(1121)に始められたと伝えられています。この盆の制作年代を直接比較考定する資料を欠きませんが、髹飾、螺鈿の技法から観測して、凡そ室町時代中頃まで遡りうると考えています。(石澤正男)

春日大丸盆(表)



春日大丸盆(裏)

